

一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中部支部

2021 年度第 1 回定例研究会プログラム

日時：2021 年 12 月 11 日（土）14 時 30 分～18 時 30 分

Zoom 開催（参加無料・事前予約制）

参加方法：JACET 中部支部ホームページ（<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>）より、
事前に参加申し込みをお願いします

開会挨拶 14 時 30 分～14 時 35 分 支部長 今井 隆夫（南山大学）

支部総会 14 時 35 分～14 時 45 分

研究発表第 1 室

実践報告 14 時 50 分～15 時 20 分 司会 今井 隆夫（南山大学）

英語授業におけるプレゼンテーションの実践
—自己評価及びピア評価におけるルーブリックの活用—

松家 鮎美（岐阜薬科大学）

実践報告 15 時 25 分～15 時 55 分 司会 今井 隆夫（南山大学）

The role of L2/L1 translation in teaching reading

Ekaterina Arshavskaja（静岡県立大学）
Atsushi Fujimori（静岡県立大学）

研究発表第 2 室

研究発表 14 時 50 分～15 時 20 分 司会 大石 晴美（岐阜聖徳学園大学）

大学の遠隔英語授業下での紙媒体教科書の使用が創発的探究コミュニティの形成に及ぼす影響
松岡 弥生子（国際基督教大学）
井田 浩之（城西大学）

実践報告 15 時 25 分～15 時 55 分 司会 小宮 富子（岡崎女子短期大学）

オックスフォード大学から学ぶ SDG s 教育 中谷 安男（法政大学）

研究会研究発表 16 時 00 分～16 時 45 分 司会 大森 裕實（愛知県立大学）

【最新言語理論に基づく応用英語文法研究会】

21 世紀 ELF 時代の英語教育に求められる言語知識をめぐって

大森 裕實（愛知県立大学）
長峯 貴幸（リカスター大学博士後期課程）
今井 隆夫（南山大学）

講演会 16 時 50 分～18 時 20 分 司会 大森 裕實（愛知県立大学）

翻訳コンピテンスの教育と TILT および機械翻訳を使った英語教育の可能性
山田 優（立教大学）

閉会挨拶 18 時 25 分～18 時 30 分 副支部長 安達 理恵（椋山女学園大学）

発表概要

研究発表第Ⅰ室

実践報告 14時50分～15時20分

英語授業におけるプレゼンテーションの実践 ―自己評価及びピア評価におけるルーブリックの活用

松家 鮎美(岐阜薬科大学)

本研究では、英語授業において、グループ・プレゼンテーションを行い、ルーブリックを用いた自己評価及びピア評価を行った。授業後にはアンケートを実施し、その結果、9割の学生が、①教員から評価を受けるだけでなく、学生同士でも評価することが必要である、②教員と学生から評価を受けることが、プレゼン力を身につける一助になると回答した。また、ルーブリックによる評価について自由記述で尋ねた所、自分に足りない点を具体的に意識できるという回答や、他者の良い点を見つけやすい等前向きな声が殆どであった。しかし、依然として8割の学生がプレゼンを行うのは好きでないと答えており、今後もルーブリックや評価法の改善を行い、プレゼンに対する意識を和らげることが重要である。

実践報告 15時25分～15時55分

The role of L2/L1 translation in teaching reading

Ekaterina Arshavskaja (静岡県立大学)

Atsushi Fujimori (静岡県立大学)

To understand the effectiveness of translation in SLA, our current research proposes translation exercises as a means of focusing students' attention on sentence and paragraph structures. Two groups of undergraduates (29 students each) participated in the study. The target group completed translation exercises aiming at reflecting sentence structures of English texts. The control group used comprehension questions. Their comprehension was checked at pre-, mid- and post-tests. At the post test, the target group outperformed the control group by 13.8% in correctly selecting conjunctions or conjunctive adverbs connecting a sentence to another.

研究発表第2室

研究発表 14時50分～15時20分

大学の遠隔英語授業下での紙媒体教科書の使用が創発的探究コミュニティの形成に及ぼす影響

松岡 弥生子（国際基督教大学）

井田 浩之（城西大学）

本研究は、コロナ禍の大学英語遠隔授業に於いて、紙媒体の教科書が果たした役割に対する学生の認識を検証、分析することを目的とする。2020年度12月に、首都圏の大学1年生94人に、大学のオンライン学習管理システム(LMS)上で、選択式と自由記述による質問紙調査を実施した。その結果、紙媒体教科書が、学習者の柔軟な学習形態や経験に合致しており、遠隔学習の不安を軽減し、学生にクラスの一体感を実感させていたことがわかった。これを踏まえ、現実のクラスを実感し難い遠隔授業下で「緊急に創発された探求コミュニティ」とも呼ぶべき学習の集団の形成について、Garrison (2017)のCommunity of Inquiry (和訳は探求コミュニティ)の概念モデルを理論的枠組みとして、論じる。

実践報告 15時25分～15時55分

オックスフォード大学から学ぶSDGs教育

中谷 安男（法政大学）

現在、日本の英語教育においてもSDGsの概念を導入し学習者のクリティカル思考や、社会問題への関心の喚起を促進する重要性が認知されている。本論ではオックスフォード大学のディベート組織ユニオンに注目し、学生たちがいかに社会的な課題に向き合い、解決を目指しているのかを紹介する。その上で、このようなディベートで適切な議論を構築するためのパラグラフ・ライティングの指導法を紹介する。具体的には、コンビニエンス・ストアにおける食物廃棄やエネルギー浪費等の課題に対して、独自の主張の展開に有効なブレインストーミングと5つのクリティカル思考法を活用した指導例を報告する。結果として学習者はより多様な観点から意見を構築できることが示唆された。

【最新言語理論に基づく応用英語文法研究会】

21世紀 ELF 時代の英語教育に求められる言語知識をめぐって

大森 裕實（愛知県立大学）

長峯 貴幸（ランカスター大学博士後期課程）

今井 隆夫（南山大学）

今世紀が ELF 時代であり、その視点からの英語学習及び英語教育が必要であることを強く印象づけたものは時代の幕明きに上梓された Jenkins（2000）であった。鈴木孝夫はかつて日本人にとっての英語が「目的言語」（明治黎明期の英学）から「手段言語」（意思疎通の相手が英語母語話者）を経て「交流言語」（非英語母語話者間の意思疎通）になったことを指摘した。それは Kachru のいう Expanding Circle に属する人々との意思伝達が増加していることを意味する。英語母語話者の言語能力・運用にできる限り近づこうとする従来の学習モデルは間違っていないが、それだけで多様なニーズに応えられなくなったことを示している。本発表では、発表者間の質疑応答形式を採りながら、ELF 時代の英語教育に適応できる言語知識とは何かについて考究する。第 1 部では、長峯と大森の言語的談話を通して、「英語音の多様性と習得モデル」について考察を行なう。大森は伝統科学文法及び伝統的音声学音韻論の観点から、従来型の英米語標準モデル（修正 RP／修正 GA）の習得で ELF 時代の様々な英語音声にも十分に対応できると考えるが、他方、長峯は英語非母語話者音声の聴解及びその指導法に関して、さらなる検討が必要であると主張する。新学習指導要領や大学入試共通テスト問題作成方針で示されたように、「現代の多様な発音」に対応できる学習者の育成が求められている現状に鑑みて、それに対応できる音声学習のあり方を追求する必要がある。そこで、Kachru のいう Outer Circle や Expanding Circle に属する人々の英語に看取される音声特徴について、従来モデルとした Inner Circle の英語との比較と音響分析、日本人英語学習者の聴解における誤用の分析等を通して、議論を深めたい。第 2 部では、今井と大森の言語的談話を通して、「多義語と多義性」について考察を行なう。大森は歴史言語学及び英語史的観点から、たとえ形が同一であっても、語源の異なる単語は意味のネットワークとして繋がることはなく、個々の語彙として心的辞書に記憶されるべきであると考え、他方、今井は従来の英語教育で行われてきた多義語の学習方法—多義語の意味は、無関連なものとして、それぞれに訳語を与え、暗記すること—では効果的ではないと主張する。すなわち、「形が同じなら意味に類似性や関連性がある」という認知言語学の考え方を参照することで、多義語の学習が有機的に行なえることについて提案する。また、認知言語学的には、多義は語のレベルだけでなく、過去形などの文法要素や、構文にも言える文法的特性であり、それらの多義性についても具体的事例を挙げて検討したい。

講演概要

講演会 16時50分～18時20分

翻訳コンピテンスの教育と TILT および機械翻訳を使った英語教育の可能性

山田 優 (立教大学)

翻訳が20世紀の外国語教育から排除されてきたことに、科学的根拠はないが (Cook, 2010)、TILT が外国語教育に効果的なのかといえ、その根拠もまた不在である。その原因の一つは、「翻訳とは何か」をめぐる根本的な問題と関係する。このことは、高品質の機械翻訳に誰もがアクセスできる「with MT 時代」における英語教育の必要性 (田村・山田, 2021) の議論とも接合する。つまり TILT とは翻訳者育成の文脈における「翻訳コンピテンス」の教育の応用と考えることができるが、これは「翻訳のメタ言語」(Miyata, et al., forthcoming) を通して行われる必要がある。本発表では、まず翻訳のメタ言語の説明と、その翻訳者養成・翻訳教育への応用と外国語教育との接点、そして「with MT 時代」の英語教育の可能性について概説する。

References

- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*, Oxford University Press.
- Miyata, R., Yamada, M., & Kageura, K. (2020, forthcoming). *Metalanguages for Dissecting Translation Processes: Theoretical Development and Practical Applications*. Routledge.
- 田村颯登・山田優 (2021) 「外国語教育現場における機械翻訳の使用に関する実態調査：先行研究レビュー」 *MITIS Journal*, 2(1): 55-66. [Online]
http://jaits.web.fc2.com/Yamada_Tamura_3.pdf (2021年5月30日) .

【講師紹介】

山田 優 (やまだ まさる)

立教大学異文化コミュニケーション学部教授。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士 (異文化コミュニケーション学/翻訳通訳学)。フォードモーター社内通訳者、産業翻訳者を経て、株式会社 翻訳ラボを設立。今は、翻訳通訳研究に没頭中。研究の関心は、通訳翻訳研究全般、訳出プロセス、翻訳支援ツール、翻訳メモリ、機械翻訳、ポストエディット等、翻訳通訳教育、翻訳通訳リテラシー教育、TILT。

日本通訳翻訳学会理事歴任。八楽株式会社 チーフ・エバンジェリスト。一般社団法人アジア太平洋機械翻訳協会 (AAMT) 理事。著書に坂西優との共著『自動翻訳大全』。

事務局からのお知らせ

- ☆ JACET 中部支部 2021 年度第 2 回定例研究会を 2022 年 3 月 5 日（土）に Zoom にて開催します。研究発表募集は 12 月 11 日（土）より開始いたします。JACET 中部支部の本年度最後の研究会となります。中部支部ホームページ (<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>) にて、研究発表申し込みに関する詳細をご覧ください、「発表申し込み」のリンクより、どうぞ、奮ってお申し込みください。



2021 年度第 1 回定例研究会(12 月 11 日)

参加申し込みサイト

<https://bit.ly/30i3mq0>

定例研究会に関するお問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

支部事務局：名古屋工業大学 吉川りさ研究室内

yoshikawa.lisa@nitech.ac.jp